

クラシック音楽教育 —ポーランドと日本の比較—

ベアタ・コヴァルチック*

本発表は博士論文で取り上げる問題点の一部を紹介するものであり、即ち、日本とポーランドにおけるクラシック音楽教育の比較を目的としています。博士論文のテーマは「欧州における日本人演奏家のキャリア、職業上の道・経路」であり、欧州における日本人演奏家の職業を分析し、クラシック音楽世界へ導く経路、またはそこで実際に活動する可能性を論じます。

当研究は質的調査という方法で実行します。質的調査は多種多様であり、私は主に個人取材と演奏家の活動（例：コンサート、マスタークラス、夏の短期コース、リハーサル、音楽録音など）を観測する二つの方法を軸にしました。当研究はポーランドとフランスのクラシック音楽界で活動する日本人演奏家のキャリアの比較を目指します。今まで集めたデータは、ポーランドでは22人の日本人の回答者のインタビューからと、フランスでは14人の日本人の回答者の話からのものです。全てのインタビューは録音し、内容を分析しました。本発表は上述データのポーランドの部分を参考にしています。

いかなる理由で教育を論じることを問題点として選んだかという点、クラシック演奏家のキャリアでは、「適切である教育」が他の職業と比較にならない程、重要であるからだと考えるからです。調査の際出会った日本人は全員が成熟した演奏家であり、ポーランドで（ほぼ全ての場合ワルシャワにあるショパン音楽大学）の留学経験と仕事

の経験を持ち、その知識を持った視点から日本とポーランドの教育制度を比較して、その長短を指摘しています。

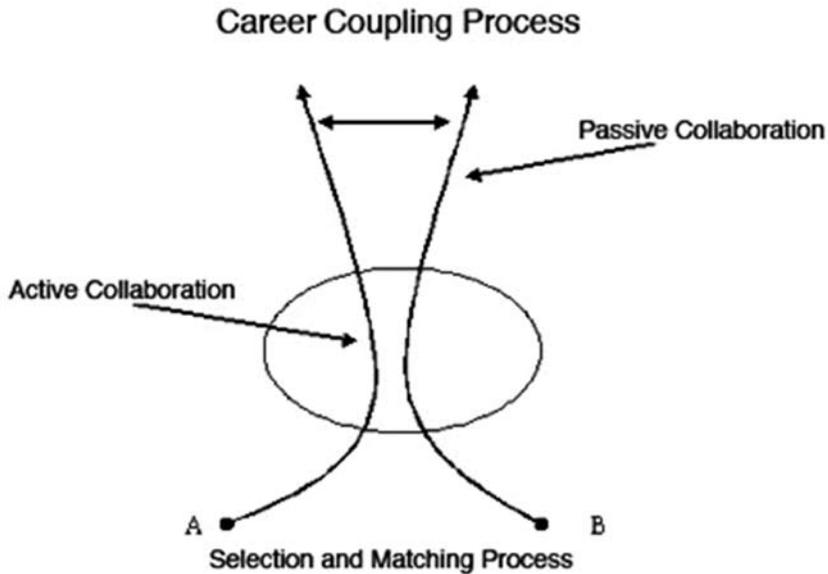
最初に本研究におけるキャリアの意味、即ち演奏家のキャリアの進路は人生の進路と同時に展開していくことを強調して、説明したいと思います。

1. 一般的な定義ではキャリアとは生涯を通しての人間の生き方や表現とってよいでしょう。
2. ところが労働社会学のシンボリック相互作用論におけるキャリアとは効果的な人間関係を通して展開していく過程です。演奏家は結ぶ人間関係（キャリア経緯における出会い）の質が高ければ高いほど、音楽家として成功します。
3. キャリアとはもともと「馬車道」を意味しました。ここからは「ギャロップ（疾駆）」という言葉も出てきたように、キャリアには「一本の道を走り抜ける」という意味もあります。官公庁で使われている「キャリア組（国家公務員試験の第一種合格者で、他の職員より早く高い地位に就く人たち）」も示します。

次に、教育とキャリアの経緯はいかなる要素で結ばれているかがどのような段階で成り立っているかという点を論じますと、それは特に師弟関係、それに由来する「Career Coupling Process」という現象だと考えられます。

「Career Coupling Process」とは数年間にわたって生徒「B」が先生「A」と共同して勉強している3段階から成り立つ師弟の相互関係を描く理論です。上記の図面でご覧の通り、初めはマッチングとセレクションの課程があります。次は活発的

*ワルシャワ大学、パリ・ソルボンヌ大学博士課程



なコラボレーションが相次いでいます。生徒の成功により、習う先生の評価や、音楽教育界における地位が強まるという現象が観察できます。最後に、教育が完了することによって、従来の活発的なコラボレーションは活発的なコラボレーションに変質します。

さて、本格的な比較の結果を紹介します。その一つのポイントは日本とポーランドにおける教育制度、初期から後期まで三段階ある教育施設とその特徴を述べます。そして、次いで日本とポーランドにおける師弟関係の特質と文化的な背景を取り上げます。

1. 初期段階

2・3歳から10～12歳までの段階であり、音楽に興味を持たせる、基礎を身に着ける時期を指摘します。

2. 中期段階

12歳から～16歳・17歳までの段階であり、演奏会、初めてのコンクール、コンサートに挑戦する時期を意義します。若い演奏家、とりわけソリストキャリアを目指すピアニストやバイオリニストなどの職業上の将来的な可能性を見いだせる時期でもあります。教えた経験を持つ方は、インタビューでコンサートピアニストになれる・なれないは、何歳までに決まりますかと聞かれた際、下記の通り証言しました。

「一般的には、高校の時には出来ていないと。ピアノを弾くことが難しいという感覚がない人にならなくてはならない。遅くても18歳。できれば15、16歳までに技術的なことはできていないと。音楽的なことはもっともっと成長していきますけど、ピアノと体を一体化させることは15、16歳までに出来ていないと厳しいと思います。」

3. 後期段階教育あるいはキャリア

ここは多くの場合海外での留学によって技術・表現力を磨いたり、演奏したり、音楽録音をしたり、個人レッスンをしたりして成熟した演奏家として活動します。または、客観的であれ主観的であれ、様々な理由によって音楽界でのキャリアを諦め、転職する時期でもあります。

上述の三段階は日本とポーランド、国別の教育機関に関するレベルと絡み合っているため、簡単に日本とポーランドの音楽教育制度を紹介します。

まず、ポーランドでは一般教養上とロシア音楽教育制度を原型として共産主義時代に発展した英才教育、二つの道があるということが特徴です。前述は国立音楽教育期間、小学校から、中学校、高等学校、音楽大学までの制度のことを指します。英才教育とは初期に派遣された才能のある子供用の特別教育環境のことを言います。ある子供が天才であると認識されると、個人教育道を歩む特権を与えるのです。その特権の例を挙げますと、コンクールの前に、その準備のため学校を完全に休めるなどのことです。日本で人気のあるプライベートレッスンの制度は殆ど存在せず、同様のレッスンを受けるとなると、それは主流の教育のためではなく、不足する技術を補足するためのものになります。

ところが、日本の音楽教育は主にプライベートレッスン、音楽教室（ヤマハ音楽教室・カワイ音楽教室など）に基づいています。その傍ら、ポーランドと同様な国立音楽教育期間は発展せずに、私立音楽大学とそれに付属する高等学校という制度が特徴として挙げられます。

次いで、取材材料を基に整理した日本とポーランドにおける文化的な背景に関する師弟関係の特質を取り上げます。

まずポーランドは概ね下記の特徴が挙げられます。先生を頻繁に変える傾向が強い、欧州を回りながら良い先生を探すこと、履歴（音楽界内の評

価）で先生を選ぶこと、先生を真似する時期は短いこと、自分から解釈を提案すること、自由に意見を言うことなどが期待される、自発力を養うことなどと言った側面も指摘できます。

それに対して日本の師弟関係は家元制度に由来する師弟関係上下関係が第一の特徴で、先生を変えないようにすること、先生の演奏を模倣すること、先生の解釈に反対しないことなどが取り上げられます。

上述の師弟関係以外の、例えばポーランドと日本の音楽教育間の相違点、共通点はインタビューからの引用をもって例証することができます。

第一に：表現力対技術、又は能動的な演奏家対受動的な演奏家

日本の教育制度はどちらかといえば完璧な技術を身につけることを重視するが、ポーランドの先生方は技術より表現力を養うことを大事にします。教えた経験を持つ日本人の方は下記のように証言します。

「日本のピアノは、やっぱり非常に技術的な感じがあるが、ただポーランド人は曲の表現面（表現力を活かす）のようなものを重視して、技術面で劣るのは不思議です。」

第二に：音楽以外の一般教養、いろいろな先生に出会うこと

背景的な知識が豊かであればある程、音も豊かに聞こえるということは音楽界の常識です。絵画を観たり、音楽を聞いたり、文学を読んだりといった知的経験によって演奏はより深くなると音楽教育機関の代表者がよく述べています。その点で西洋の子供は東洋の子供よりも熟達していると言えるでしょう。なぜなら、前者はクラシック音楽の発祥地で生まれ育っているからです。

「(西洋人の)教育が幅広いとか、詩をよく知っているとか、文学も良く知っているとかが日本の優秀なピアニストには結構欠けたりする。」と日本人の演奏家が証言します。

第三に：海外に出る切っ掛け

海外に留学する日本人の子供が毎年増えていると言うことは確かです。しかし、国内でのキャリアを目指す若い演奏家が国際コンクールよりも、国内コンクールに目を向けて、国内のネットワークを作ることに力を尽くします。それは当然なことだと日本人の演奏家が証明します。

「どうしても日本は島国なので、優秀な子ほど日本のコンクールに目がいってしまうところがあるんです。外国のコンクールで上手くいってもいなくても、世界のコンクールを見ないと、感覚が国際的にならないのです。

日本のピアノの世界は、ちょっと内向きであるような気がします。」

ところが、コストや、地理的な距離などの面から見ると、ポーランドの若い演奏家が欧州をより簡単に移動できるのは当然です。それなのに、海外の音楽界でのキャリアを目指す音楽家が比較的少ないと言う気がします。なぜならば、欧州での就職競争は激しいし、音楽ポストがあれば、どうしてもその国の演奏家を外国人より優先させる傾向があるからです。

最後に：海外で活躍している先生

海外で活躍する先生は数もポーランドも日本も共通して少ないとインタビューで知りました。

「本当は海外に日本の有力な先生がいればいいんですけど、僕らの世代の先生が外国の教育現場で活躍していないというのがいけないと思うんです。その点で日本はとても弱いと思います。それは、内気なメンタリティーと語学の弱さ。日本人は日本にすぎかなと思います。」

「コンクールに出たいと言うことで、ポーランドのX先生やY先生につくことがあるのですが、世界のコンクールシーンで成功している先生とは言えないんです。」

海外で活躍する先生は国内のネットワークを海

外へ伸ばし、多種多様な壁を乗り越えることによって、若い演奏家の世界キャリアへの架け橋を作るに違いありません。

上記の内容を簡単に纏めると、世界の音楽界でキャリアを積むことは色々な要素が絡み合っただけでひと筋縄でいかないというのが結論です。

参考文献

- Babbie Earl (2003). *Badania społeczne w praktyce*. Warszawa: PWN.
- Hughes Everett (1971). *The Sociological Eye: Selected Papers*. Chicago: Aldine Atherton.
- 久保田慶一 (2008). 「音楽とキャリア」。東京：スタイルノート。
- Wagner Izabela (2006), *Career Coupling: Career Making in the Elite World of Musicians and Scientists*, "QSR", Vol II, Issue 3, (December), pp. 78-98.
- Westby David L. (1960). *The Career Experience of the Symphony Musician*. "Social Forces", Vol. 38, No. 3 (March), pp. 223-230.